◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第32回／大客室《応接セット》

Residence of Prince Asaka 1933—

東京都庭園美術館は昨年10月1日に開館25周年を迎え、記念展として「1930年代・東京」展を開催しました。この展覧会の準備と併行して朝香宮邸のオリジナル家具の調査を行いました。

1983（昭和58）年の美術館開館時には、第一応接室と喫煙室の家具など数件を除き宮邸で使用していた家具はほとんど残されていませんでした。特に、開館以来、機会をみては関係者を辿り探していたのは、1階接客スペースである大広間、大客室、大食堂の家具です。当時の関係者の多くはすでに他界され、調査はすぐに壁に突きあたってしまいます。しかし幸運にも、今回は25周年を祝うかのようにオリジナル家具の一部を発見することができました。そして現所蔵者のご協力により、「1930年代・東京」展への出品が叶ったのです。

竣工当時の写真と比べてみると、その家具は1階「大客室」の応接セットということがわかります。無地の布部分は柄のある布地に張り替えられていますが、肘掛や脚部、丸い背もたれのデザインから、同じソファーであることは明らかです。また2枚の厚手の円形ガラスを用いた個性的なデザインのテーブルも目を惹きます。木製の支柱は金属飾りがアクセントになっています。機能美と装飾美を備えた、まさしくアール・デコの特徴を表わしています。

図2

『朝香宮邸新築工事録』にこれらの家具の図面が含まれていないことと、そのデザインの特徴から、この応接セットはフランスからの輸入品とおもわれます。朝香宮邸のなかでも大客室はラリックのシャンデリアをはじめ最もアール・デコのエッセンスが集められた空間です。家具も室内装飾を手がけたアンリ・ラパンによりコーディネートされたと考えるのが自然でしょう。

図1

当時は、この応接セットと同じデザインの長椅子と小椅子が組み合わされた複数のセットが置かれ、宮邸に招かれた人々をもてなしました。宮家がこの館を後にした1947（昭和22）年以降も、外相・首相公邸、迎賓館など各時代の賓客を迎えた家具です。建物と同様に貴重な歴史的場面に立ち会ってきたことでしょう。（高波）◆

図3

図1.「1930年代・東京」展 第2展示室（旧大客室）展示風景

図2.1階大客室（昭和8年竣工時）

図3.白金プリンス迎賓館時代の旧大客室（昭和57年）